

汲古一心

『隠元・木庵・即非の書』(一)

中村素堂

一 中国渡来の名僧

黄檗という、すぐ「楼門を出づれば日本の茶摘みうた」という名句が思い出される。

いま宇治の万福寺を訪れても、この句ほどの興趣はないが、さすがにあの境内のすがすがしさはそうざらにあるものではない。

隠元・木庵両禅師苦心の経営が歴然と遺っており、老松と建物それにあの行きとどいた清掃、廻廊に傍うた水の流れ、洛中洛外の禅刹中でも特色のある清く明るい一山である。

このはなやかさを捨てきつた簡素な大建築をわずかに飾っているものは、楹聯の類と扁額の文字くらいのもではあるまいか。彫刻や塗装などを施さない木地のままの殿堂であることも、中国風といわれてはいるが、最初からどうも大分日本化していたのではないかとも思う。

中国渡来の名僧のために建てた寺といえ、鑑真のための唐招提寺、それから鎌倉の建長寺、円覚寺など、この万福寺もあわせて長崎あたりの寺以外は、何となく日本趣致とつけ合っているように見えるのは、見馴れているせいなのであろうか。

そういう中でこれだけはいかにも中国風の趣きだなど印象づけられるのは、前述の楹聯だの額だのの句のすばらしいこととその書の立派さである。

「黄檗の書僧」という定評もあるが、そのうちでも創立期の隠元・即と組んで略称される三禅師の書は、この境内の随処に掲げられて心ある人々の眼をひきつけている。

この名僧方が日本に來られた時代は明の亡国前後のところで、水戸藩に行かれた朱舜水・心越、長崎に留った愈立德、また隠元禅師よりひと足さきに来ておられ、後に隠元会下に入ったようにいわれる

独立、みなある意味では清朝を避けての来朝であったかも知れない。したがって明人としての国風が身について、満州朝廷の支配下にいることをいさぎよしとしないものであって、もし外国に通れても本来のものは伝持するの志があったと見られるのである。

中国禅門での黄檗・臨済の古い祖師方の関係はすでに知悉されているところであるが、後にその黄檗山に住した名僧・費隱通容の会下で第一に嗣法したのが隠元で明末禅家の竜象と目されていたのではないかと思う。この隠元が日本渡来の翌年に、その招きでかつては諸大徳に歴参し費隱会下から隠元にも参究していた木庵性瑠が来朝し、さきに随従してきた竜溪とともに日本黄檗の法幢を樹てるために大いに努め、万福寺を開いて隠元を開祖に、ついで二世を木庵が嗣ぎ、以下二十一世まで中国僧を迎えていたことも日本禅門では珍しい例である。ちなみに現在はいま五十何世かになるかと思う。

この隠元・木庵禅師の宗門展開の成果は、その人柄によるのである。隠元は渡来されると各地に留錫しつつ、ついに開創の基をなすことに成功し、木庵は四方に奔走して各地に宣布の道場を開き万福寺も増築してほとんど今日の盛観を完成したと讃えられている。

この両禅師よりさらに遅れてやはり隠元会下の人で、招かれて来朝したのが木庵の法弟即非如一である。即非は隠元に謁して木庵とも協力よく宗風の興隆につくし、数年の滞在後本国へ帰るつもりであったのが、途次福岡県小倉の当時の藩主に請われて封内に福聚寺を創建し、数年の後、長崎に退き、来朝の時に留錫した崇福寺に遷化して、ついに万福寺歴世のひとりとなることはなかったが、黄檗門当初における木庵・非両禅師の存在は二つの甘露門と目されて、この一宗を重からしめるものがあつた。

そして隠元についてその弟子、木庵の弟子即非の弟子などが万福寺歴世として法を嗣ぐようになるのである。(つづく)

〔筆間雜記〕中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。
(『大法輪』昭和四十七年七月)